

聖書：I サムエル 28：3～25

説教題：主の御言葉に聞き従う

日時：2017年8月13日（夕拝）

サムエル記第一は全部で31章ありますが、いよいよその終わりに近づいて来ました。私たちはこの書の中で預言者サムエルについて、またイスラエルの初代王サウルについて、そして次の王ダビデについて見て来ましたが、初代王サウルの行き着いたあわれな結果が、この第一の書の終わりと共にまとめられようとしています。

まず今日の章に見るのは、主に祈り、御心を伺っても、答えを頂けないサウルの姿です。ここでペリシテ人との戦いが勃発します。ペリシテ人は北方に上ってシュネムに陣を敷きます。一方のイスラエルは山地のギルボアに陣を敷きます。5節に「サウルはペリシテの陣営を見て恐れ、その心はひどくわなないた。」と記されています。かつては勇敢に戦い、輝かしい勝利を収めたサウルでしたが、ある時から人が変わってしまいました。ここでも戦う前から自分はおそらく負けてしまうだろうという否定的な思いで一杯になっています。そこで「主に伺った」と6節にあります。色々な方法を彼は試みしました。「夢」によって、「ウリム」によって、「預言者」によって、・・・しかし主からの答えは何もなし。戦いを前にして最も助けが欲しい時なのに、あるのはただ沈黙のみ。こうしてサウルは一層の不安と孤独の中に放置されたのです。

なぜ神は答えてくださらなかったのでしょうか。これまでこの書を読んで来た私たちはその答えを知っています。それはサウルが主の言葉を軽んじ、これに従わず、また悔い改めもせず、神との正しい関係を築いて来なかったからです。後に18節ではっきりとその理由が述べられます。だから主はもはや彼の求めには答えてくださらなかった。ついにこういう状態に彼は至ったのです。

彼がこの扱いを受けるまでの間には多くのプロセスがあったことを私たちは思い起こすべきでしょう。主は一度の不服従でこのようにされる方ではありません。少し振り返ってみますと、まず13章でサウルは自分の手でいけにえをささげる罪を犯しました。サムエルから前もって、私が到着するまで待つようにと言われたのに、その言葉を無視

し、自分の考えで、してはならないと言われたことを勝手に行ないました。サウルの歩みはここからおかしくなりました。続く 14 章でサウルは神からの言葉をいただけないまま、ペリシテ人との戦いに向かいますが、「夕方まで食事する者は呪われる！」という unnecessary な誓いを民にさせ、それとは知らずに蜂蜜を食べた息子ヨナタンを殺そうとして、民の猛反対にあいます。そして自分の言葉を撤回せざるを得ない状態に追い込まれた。この時も神によらずに自分の知恵で行動してもうまく行かないことを学び取って、彼は自分の姿勢を悔い改めるべきでした。しかし次の 15 章で彼は 13 章と同じ過ちを繰り返します。アマレク人を聖絶せよ！と主に命じられたのに、羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ、聖絶しませんでした。またしても神の言葉よりも自分の考えを優先させました。このような悔い改めないサウルの姿はダビデとの関係においてもずっと示されて来ました。ゴリヤテとの戦い以来、サウルはダビデをねたみ、何度も彼を殺害しようとしていました。槍を投げて繰り返し壁に突き刺そうとしたり、戦場に送り出して密かに戦死させようとしたり、娘との結婚を使ってペリシテ人の陽の皮 100 枚を取って来るように言い付けたり、…。しかしどれもこれももううまく行きません。そこでサウルは悔い改めることができたはずなのに、ついに家来全員にダビデ殺害の思いを伝え、彼を捕らえようとしています。19 章では自分が出て行きましたが、預言者の集団に取り込まれ、着物を脱いで預言し、一昼夜、裸で倒れたこともありました。こんな恥ずかしい経験をしてはまだやめない。そして最近見ましたように、24 章では用をたすためにほら穴に一人で入って行ったところを、ダビデから助けられました。あの時、彼は声を上げて泣き、「私が悪かった」と言いましたが、2 章あとの 26 章でまた同じことを繰り返しました。全然悔い改めていないサウルです。神は忍耐に忍耐を重ね、このサムエル記第一のほとんどのスペースを割くほど悔い改めの機会を与えてくださいましたが、彼はそれを一向に生かさない。としたら今日の章のことは起こるべくして起こったと言わざるを得ないのではないのでしょうか。神は悔って良いお方ではありません。私たちがどう歩んでも「赦して下さい」「導いてください」と言えば、いつでもそうして下さる都合の良い方ではない。主の働きかけを退け続けるなら「恵みの期間はもうこまで」という日が来る。いくら恐れに震えて金切り声をあげて叫んでも、神はもう何も語ってくださらないという日が来るのです。

こうした状況でサウルはどのように行動したのでしょうか。7 節以降を見ると、サウル

は何と霊媒女のところへ走って行きます。彼に悔い改めの心がないことはここからも分かります。なぜ自分は主から答えを頂けなかったのか、そのことを思い巡らし、心から悔い改めるなら、とても霊媒師のところへ行くという行動など取れません。3節には、サウル自身が国内から霊媒や口寄せを追い出していたと書かれています。ご存知のように、霊媒や口寄せは神が律法の中で厳しく禁じている行為です。サウルはこれらを行なう者たちを追い出すという主の御心にかなうことを以前は行なっていました。ところがその霊媒師のところへサウルが自ら赴くのです。そして霊媒女が霊媒を行なうことを恐れた際、サウルは10節でこう誓います。「主は生きておられる。このことにより、あなたが咎を負うことは決してない。」 何という不適切な主の御名の用い方でしょうか。主への恐れ敬いは全くないと言わざるを得ません。これが主の御言葉を退け続けたサウルが至った末期的状態なのです。

さてサウルがここへやって来た目的は、預言者サムエルを呼び出してもらいたいということだったようです。神からお答えを頂けなくても預言者サムエルにすがれば、何か神の御心を聞くことができるのでは？という期待を持った。この記事は読む私たちを当惑させるものです。本当にここに出て来たのはサムエルなのでしょうか。神が禁じている霊媒師を通して、サムエルが呼び出されるなどということが本当に起こり得るのでしょうか。しかし15節は聖書記者がはっきりと「サムエルは」と言っているわけですから、ここに来たのはやはりサムエル本人であったと言えます。もちろんこのことは、神が霊媒師を承認しているとか、あるいは霊媒師にこのような力が本当にあるということではありません。神に不可能なことは一つもありません。神は霊媒師のところにやって来たサウルに最後の警告を与えるため、ここではこのような方法をあえて取られたのだと考えることができます。新約聖書にも、すでにこの世を去ったモーセとエリヤがイエス様と語り合うために高い山に現れた場面があります。神はそのようにご自身の御心を示すために、この状況を逆に用いてサウルへの言葉を語られたと見ることができます。

しかしサムエルの言葉は、サウルに何も希望を与えるものではありませんでした。サムエルは16節で「なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。」と言います。そして彼がこのような報いを受けるに至った説明として18節でこう言います。「あなたは主の御声に聞き従わず、燃える御怒りをもってアマレクを罰

しなかったからだ。」 サウルの不服従は1回だけのことでありませんでしたが、「主の御声に聞き従わない」という彼の歩みを象徴する出来事として、アマレクの時のことが述べられています。そして彼に下るさばきの詳細が19節に語られています。すなわちそれは「あなたはイスラエルと一緒にペリシテ人の手に渡される。そしてあなたもあなたの息子たちも明日、死ぬ。」ということです。私たちはこれを見るとサウルが可愛そうにも思えて来ます。何とかもう一回、せめてもう1回だけ彼にチャンスが与えられることはないのだろうかと思います。しかしこの箇所が示していることは、もうその期間は終わったということでしょう。いや仮にもう1回チャンスが与えられたとしても、サウルが正しい道に立ち返ることなど考えられるでしょうか。これまで見て来た私たちは決して肯定的な結果を期待できないでしょう。むしろこれまで悔い改めの道を進んで来なかった彼には、もう悔い改めることなど不可能なのです。この28章における彼の行動すべてがそれを物語っています。

最後20節以降に記されているのは絶望的な状態のサウルです。彼は恐れあまり、倒れて地上に棒のようになってしまいます。食事ものを通らない。女がパンを差し上げますから食べて下さいと言いますが、「食べたくない」と答えます。その気力もありません。しかし、しきりに勧めるので起き上がって何とか食べた。しかしもはや生ける屍の状態。読むのもつらくなるような記述です。最後の25節には「その夜、彼らは立ち去った。」と記されています。これは単にサウルがここを出て行ったのは「夜」という時間だったということを語っているだけではないと思います。これはサウルがついに進んで行った霊的な暗やみを暗示するものでもあるのではないのでしょうか。思い起こされるのは12弟子の一人、イスカリオテのユダのことです。彼がイエス様をついに裏切って出て行った時のことが、ヨハネの福音書13章30節にこう書かれています。「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった。」12弟子のユダも特別な特権にあずかっていた者であり、また何度も悔い改めの機会を与えられていたにもかかわらず、それを退けて、ついに悔い改めることのできない状態に至ります。そして出て行った時は夜であった。二度と引き返すことができない霊的な暗闇へと出て行った。この二人の姿がダブって見えてくる場面ではないでしょうか。こうしてサウルは次の日の運命を待つだけの身となりました。その彼の最期がサムエル記第一最後の章に記されることとなります。

私たちはこの章を読んでどうでしょう。サウルと同じ道を歩んでいることはないでしょうか。彼のようにならないための方法とは悔い改めの機会を軽んじないことです。いつまでもチャンスがあるかのように考えないことです。一度でも従わない歩みをしたらサウルのようになるということではありません。この状態に至るには長いプロセスがあったことを私たちは見て来ました。しかし主のあわれみがあることをいいことに、いいかげんな生活が続けるのではなく、手遅れにならない内に、急いで主に立ち返らなくてはなりません。イザヤ書 55 章 6～7 節：「主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」そして主なる神は、サウルがアマレク聖絶の命令に従わなかった時、15 章 22 節でこう言われました。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」神は私たちが御声に聞き従うことを何よりも喜ばれる。そのように歩むなら、神は私たちにご自身の喜びを豊かに表してくださることでしょう。御声に聞き従うことを喜ぶと言われる神は、その前提として、それほど熱心に私たちに語ってくださいます。私たちの救いと益のために今日も語りかけてくださっています。その御声があることを当たり前と思わず、むしろ心から感謝して、その御声に耳を良く傾ける者でありたいと思います。そして私たちの感謝と信頼と愛を、その御言葉に実際に従う歩みに現し、このことを心から喜んでくださる神の祝福の中をこの新しい週も歩ませていただきたいのです。